

オレリエン・ハンターの スイスへの誘い

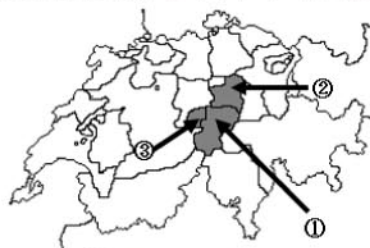
スイスの建国記念日



7月4日はアメリカの独立記念日、7月14日はフランスの革命記念日であるように、8月1日はスイスの建国記念日です。正式な建国記念日として定められたのはスイス連邦の600周年、1891年のことで、休日となったのは1994年のことでした。

「建国記念日」というよりは、日づけをそのままとて言うことが多いですが、スイス人が「8月1日」と聞いて、すぐに思い浮かぶのは花火でしょう。毎年、その日が近づくと街には花火のスタンドができ、子供も大人も目を輝かせています。家族や友達で集まり、野外バーベキューを楽しんだあとに花火を打ち上げるというのは一般的な過ごし方です。また各地で市町村長の演説、民族衣装でのパレード、民族音楽の演奏やダンス、大きなかがり火、多くのイベントが開かれ、日本の夏祭りみたいに楽しい記念日です。

今回はスイスの建国について書きたいと思います。



「森の国」と言われていた

スイス連邦 ①ウーリ、②シュヴィーツと③ウンターヴァルデンは700年もの歴史があって、ウーリ、シュヴィーツとウンターヴァルデンの間で交わされた1291年8月1日付けの「連邦協約」に基づいているとされています。伝承によって、1291年8月1日に3つの州の代表者がフィアヴァルトシュッテ湖畔のリュトリの丘に集まり、誓いを交わしたとされていることから、「リュトリの誓い」とも言います。

歴史的な背景を紹介しましょう。当時の神聖ローマ皇帝、



ハプスブルク家のルドルフがそれらの地域の自治権や自由を寛大に認めていましたが、1291年7月15日に亡くなってしまい、次期の権力者に自由と自治を奪われるのではないかと恐れて、自分たちの財産や権利を守るために、侵入する外の権力の脅威に抵抗するために相互援助を1291年8月1日に宣誓しました。

ラテン語で記された誓約文は現在でも、シュヴィーツの「連邦文書館」で見ることができ、首都ベルンにある連邦議事堂の玄関ホールには3人の同盟者の巨大な石像が置かれ、会議場にはリュトリの大きな壁画が飾られて、スイス連邦の大事なシンボルとなっています。

同じように自分のことを自分で守らなければいけないというのを象徴しているとても有名なスイス人がいます。

それはシラーの戯曲とロッシーニの歌劇で世界的に知られているWilhelm(ヴィルヘルム) Tell(テル)(英語でウィリアム・テル)です。テル物語の史実性は疑問視されていますが、当時のスイス人のハプスブルク家に対する心情を伝えていますし、現在のスイス人の6割はテルの存在を信じていますから、スイスの英雄となっています。彼の物語を紹介しましょう。



テルはウーリ州のピュルグレンという村の出身でした。事の始めは1307年11月18日のこと、テルがウーリ州の中心地、アルトドルフに息子と出かけましたが、スイスの自治に帝国がまだ介入していて、アルトドルフの中央広場に帝国の代官、Hermann(ヘルマン) Gessler(ゲスラー)が自分の帽子をポールに掛け、住民の帝国への忠実さを試すためにその前を通る者は頭を下げて敬礼するように命じていました。みなは敬礼して通っていましたが、テルは帽子に頭を下げませんでした。テルが即刻逮捕され、代官の前に連れて行かれました。ゲスラーは、テルがクロスボウの名手であると聞いて、自分の息子の頭の上にある林檎を一発目で射抜く事ができれば彼を解放すると約束しました。テルはクロスボウから矢を放ち、見事に林檎を射抜いて、ゲスラーに褒められましたが、テルの懐にもう一発が用意してあったことが発見され、その意味を尋ねるゲスラーにテルは「もし失敗して息子を殺していたならば、クロスボウをあなたに向けて撃っていただろう」と答えました。ゲスラーはさらに挑発するテルを終身禁固に罰しました。牢獄へ船で運ぼうとしていた途中嵐が起こってテルがゲスラーの手を逃れました。翌日、ゲスラーを待ち伏せて射殺したと言われています。



—— おしまい。

テルは自由、独立のためならどんな敵にも、どんな挑戦にも立ち向かう勇気のあるスイスの英雄で、像以外に昔の切手や現在の5フランの顔となっています。

スイスの各州に歴史も、風習も、文化も紹介したように言語さえ違いますが、自由と独立が大切で、それらを守りあわなければいけないと言うのは、ひょっとしてそれこそ「スイス」かもしれません。